

読む・知る・つながる大体大マガジン

# OUIHS

OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES

Vol.238 2026.4.1  
JOURNAL

〈巻頭特集〉  
開学60周年  
記念シンポジウム

〈旬な大体大生〉  
社会貢献活動に全力投球！

池田 翔さん

IKEDA SHO

大体大

# 新入生の皆さんへ

## 挑戦を楽しみ、 自らの可能性を信じよう

学校法人浪商学園

理事長 **野田 賢治**



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。学園を代表して心よりお喜び申し上げます。

大阪体育大学は、学校法人浪商学園が設置する教育機関の1つです。浪商学園は1921（大正10）年に創立され、2021年、創立100周年を迎えました。学園の建学の精神は「不断的努力により智・徳・体を修め社会に奉仕する」。この建学の精神を体現できる人材の育成を目指しています。

学園は創立以来スポーツ活動を奨励してきました。浪商高校第2代校長、野田三郎（大阪体育大学初代学長）は「スポーツを通じた青少年の健全育成」の理念の下、野球を筆頭に運動部活動を積極的に支援しました。その強い思いが大阪体育大学開学へ結びつきました。

大阪体育大学は、東京オリンピック開催の翌年1965（昭和40）年に開学しました。開学にあたり、東京オリンピック選手強化対策本部長と選手団長を務められた後に日本人初のオリンピック平和賞を受賞された大島鎌吉先生（1932年ロサンゼルスオリンピック陸上三段跳銅メダル獲得）を副学長として、またオリンピックスポーツ科学委員で、後に日本体育学会会長に就任された加藤橋夫先生を学部長としてお迎えしました。

西日本初の体育・スポーツの専門大学として、体育・スポーツを通して0歳から100歳までの健康を維持することを標榜し、産業体育・社会体育・学校体育の3コース制で教育をスタートしました。当時、この分野で最先端におられた大島、加藤両先生の思いが、本学の教育の原点です。60年以上経過した今も色あせることなく、脈々と受け継がれています。

2026年は、世界がスポーツの情熱に包まれる特別な一年です。2月に開催されたミラノ・コルティナ冬季オリンピックでは、日本代表が24個ものメダルを獲得し、冬季大会での最高記録を更新しました。選手たちの不断的努力と団結の賜物です。

極限の緊張の中で力を出し切る姿、転倒や失敗を乗り越えて挑戦し続ける姿は、私たちに「挑むことの尊さ」を教えてください。

続く3月にはワールド・ベースボール・クラシック、6～7月にはFIFAワールドカップ、そして9～10月には愛知・名古屋アジア競技大会が開催されます。2026年はまさに、世界と日本がスポーツでつながる「挑戦の年」と言えるでしょう。

大学生活もまた、挑戦の連続です。

新しい仲間との出会い、専門分野への探究、思うようにならない経験——そのすべてが皆さんを成長させます。どうか失敗を恐れず、挑戦を楽しんでください。

世界の舞台で躍動する選手たちのように、自らの可能性を信じ、一歩を踏み出してください。

新入生の皆さんが、充実した学生生活を送られることを願ってあいさついたします。

## 新たな自分を見つける 大学生活を期待します

大阪体育大学

学長 **神崎 浩**



新入生の皆さん、ご入学誠におめでとうございます。教職員ならびに在校生を代表し、皆さんを大阪体育大学の新たな仲間としてお迎えできることを、心より嬉しく、また誇りに思います。

本学は体育・スポーツの総合大学として創立され、昨年、節目となる60周年を迎えました。今年は、さらなる歩みを進める新たな出発の年でもあります。これまで建学の精神である「不断的努力により智・徳・体を修め社会に奉仕する」を体現すべく、教育・研究・社会貢献の各領域において多彩な取り組みを展開してきました。今後は、体育・スポーツの専門性を基盤としつつ、社会を支える総合的な人間力を備えた人材の育成に、これまで以上に力を注いでまいります。本学は長年にわたりスポーツ、健康、教育、地域、産業、国際、倫理といった多面的な領域において、豊富な知見と経験を蓄積してきました。これらの知的資産を最大限に活かし、教育・研究・社会貢献を通じて社会の発展に寄与する大学であり続けることを目指しています。その中心に立つのは、まさに皆さんです。教職員とともに学び、挑戦し、未来を創造していく姿勢こそが、本学の新たな歴史を形づくる原動力となります。

大学とは、「自ら学び、自ら成長する場」です。自ら一歩を踏み出すかどうかで、学びの深さも広がりも大きく変わります。できなかったことができるようになる喜び、知識が広がることで思考が深まる手応え、人としての逞しさや温かさが育まれる瞬間を、どうか存分に味わってください。その過程では、挫折や迷いに直面することもあるでしょう。しかし、仲間や教職員と支え合いながら乗り越えた先には、必ずや新しい自分が立っています。

本学の教員は、スポーツ科学や教育学の専門知識に加え、豊富な実践経験と高い指導力を兼ね備えています。その英知に触れながら、皆さんがこれまでの自分を超越、確かな成長を遂げてくれることを心から期待しています。不安と期待が入り混じる今この瞬間の気持ちを大切にしながら、どうか大学生活を思う存分楽しんでください。教職員との出会い、新たな仲間とのつながり、そして自分自身の新たな発見。これから皆さんが経験するすべてが、かけがえのない人生の礎となることでしょう。これから始まる大学生活が、皆さん一人ひとりにとって未知なる可能性を切り拓き、生涯の財産となる豊かな時間となることを願っております。



スターゲイトホテル関西エアポートで行われた修了式・卒業式



式典に参加した修了生・卒業生



神崎浩学長から学位記・卒業証書が授与された

# 修了式、卒業式を挙行

## 学業、スポーツ優秀77名表彰

第33回大学院修了式・第58回体育学部・第8回教育学部卒業式が3月17日、大阪府泉佐野市のスターゲイトホテル関西エアポートで行われた。修了生・卒業生は、大学院生は博士前期課程20名、博士後期課程1名、学部生は体育学部476名、教育学部120名で合わせて617名。

式では、神崎浩学長が博士後期課程の1名や博士前期課程と各コース代表の学生に学位記・卒業証書を授与し、学業で優れた成績を収めた加藤橋夫賞、スポーツで優れた成績を収めた大島鎌吉賞などの77名を表彰した。

神崎学長は式辞に臨み、「本学は創立以来、『不断の努力により智・徳・体を修め社会に奉仕する』という建学の精神を教育の根幹としています。皆さんが本学で身につけた知識、経験、そして人としての成長は、この精神に裏打ちされた揺るぎない財産です。この建学の精神は、『人とし

ていかに生きるか』を問い続けるものであり、皆さんの人生を力強く支える礎（いしずえ）となることでしよう」と語った。

祝辞、記念品贈呈などの後、送辞は、在学生を代表して学友会会長の福島滉哉さん（教育学部3年、大阪・阪南高校）、謝辞は、大学院総代・部谷祐紀さん、体育学部総代・松岡真叶さん（三重・名張青峰高校）、教育学部総代・曾我部彩愛さん（大阪成蹊女子高校）が務めた。

最後に、修了生・卒業生、教職員が起立し、「大阪体育大学学歌」を斉唱した。

閉式後は、伝達式が各コースなどに分かれて実施され、修了生・卒業生は一人ひとりゼミの指導教員らから学位記・卒業証書を授与された。

**【加藤橋夫賞】2名**

松岡真叶（体育学部健康・スポーツマネジメント学科アスレティックトレーニングコース）  
石田直史（教育学部教育学科小学校教育コース）  
※学業成績の学科1位

**【大島鎌吉賞】14名**

<硬式野球部女子>畑中ゆりあ、山本一花、木村睦実=2025年BFA女子野球アジアカップ優勝  
<ハンドボール部女子>比嘉楓=2022~25年度全日本インカレ優勝▽奥山紗彩、小林実杜、坂下碧、山口映=2023~25年度同優勝▽高来葵美=2022、23、25年度同優勝▽尾関菜、小沼美尋、後藤真子、佐藤若奈、篠原優和=2024、25年度同優勝

**【博士後期課程修了者】1名**

紺田俊

(敬称略)

### contents

- 01 ごあいさつ  
新入生の皆さんへ
- 02 修了式・卒業式
- 03 巻頭特集  
開学60周年記念シンポジウム

- 05 NEWS
  - 1 防災士資格取得講座
  - 2 スポーツ局指導者研修
  - 3 旬な大体大生
  - 4 キャリアフェスタ

- 07 大体大PEOPLE  
竹田 和夫  
吉本興業グループ企業エグゼクティブプロデューサー

- 09
  - 5 就職状況
  - 6 教員採用試験合格者
  - 7 入試状況
  - 8 高連携協定
  - 9 学長特別表彰
  - 10 大島鎌吉スポーツ賞
  - 11 日本スポーツマネジメント学会
  - 12 日本バレーボール学会
  - 13 ウインターキャンプ
  - 14 学生「夢」プロジェクト

- 13 コラム 窓
- 14 コラム ボーシャー

※学年表記は原則旧学年

# 記念シンポジウム



「スポーツ分野の教育・研究・社会貢献の未来」が3月6日、大阪市淀川区の大阪ガーデンパレスで開催された。てICTを活用した部活動・スポーツ指導にあたっている学生が登壇し、成果を報告した。

## DX・AXと共に創る、スポーツ分野の教育・研究・社会貢献の未来



報告・運営にあたった学生の皆さん

大阪体育大学は開学60周年の節目を迎えた2025年、「大体大ビジョン2031」で掲げる「本物」の教育・研究・社会貢献のさらなる充実を目指し、「DX・AX検討推進プロジェクト」を始動した。

シンポジウムはソフトバンク社、富士通株式会社、一般社団法人大学スポーツコンソーシアムKANSAIが後援。多数の報道関係者のほか、各大学、大阪府教育庁、徳島県庁などの運動部活動改革の担当者、ソフトバンク社関係者ら約70名が詰めかけた。

シンポジウムは、神崎浩学長のあいさつの後、基調講演として、ソフトバンクの100%子会社であるGeniAAXのエバンジェリスト、鈴木木祥太さんが「人間とAIが共に創る未来社会」



鈴木木祥太さんが基調講演

と題して講演した。

続いて、「大体大のDX・AXの現在地とこれから」のテーマで現状報告が行われ、大体大DX・AX検討推進プロジェクトリーダーの藤本淳也教授がプロジェクトの概要を説明。プロジェクトメンバーで体操競技部男子監督の藤原敏行教授が、今春、トレーニング施設として世界で初めて導入する富士通株式会社のAI体操採点支援システムについて報告した。

また、「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業」(JPEAKS)事業メンバーの浜田拓副学長と富山浩三教授が「仮想と現実が融合するスポーツツーリズム研究と社会実装」をテーマに報告した。浜田副学長は「JPEAKSは文部科学省の支援の下、立命館大学を拠点とした5年間の超大型プロジェクト。本学も連携大学として参画している」などと説明。富山教授は「本学はまずスポーツツーリズムの領域で研究を進めていく。様々なアウトドアの活動環境をメタバース空間に再現したり、リアルには体験できないような冒険の極限状態を作り出したりして、心理的な領域で多様な視点からの研究を展開したい」と語った。



開学60周年記念シンポジウム「DX・AXと共に創る、スポーツ基調講演、現状報告のほか、ソフトバンク株式会社の協力を得

## 学生シンポジウム「スポーツ指導におけるICT活用成果報告」

休憩をはさみ、学生によるシンポジウム「スポーツ指導におけるICT活用成果報告」が開催された。連携協定を結ぶソフトバンク社と大団体が産学連携し、同社のAIスマートコーチとマイクログロブローンを活用したスポーツ指導について、以下の4例が報告された。司会は、小山雪貴乃さん（体育学部4年、兵庫・三田西陵高校）が務めた。

- ① 徳島・海陽町中学校合同部活動 報告者・笹川和斗さん（体育学部4年、大阪・花園高校）、陽本千咲さん（スポーツ科学部2年、大阪・城南学園高校）
- ② 愛媛・松山やまと野球クラブ 報告者・石田空さん（体育学部4年、広島県瀬戸内高校）
- ③ 大阪暁光高校アルティメット部 報告者・家村かなとさん（体育学部3年、兵庫・六甲アイランド高校）、片岡美琴さん（体育学部3年、名古屋経済大学市邨高校）
- ④ 大阪府忠岡町立忠岡中学校ソフトテニス部 報告者・花見佳音さん（体育学部3年、大阪・今宮高校）

報告では、ICT活用の効果について、「課題として、リアルタイムで対話できないタイムラグやスキル格差、顧問との意思疎通などはあるが、ICTを活用すれば、生徒たちには言葉ではなかなか伝わらなくても、映像でなら伝えることができる」（笹川さん）、「子どもたちの成長を可視化することができ、子どもたちの主体性や意欲の向上につながった」（石田さん）、「プレーヤー目線でプレーを確認することで、『なぜ失敗したか』ではなく『次どうするか』という前向きな議論につながり、選手主体の学びや気づきが生まれた」（家村さん、片岡さん）などの

感想が語られた。続いて、折野歩菜さん（体育学部4年、兵庫・神戸龍谷高校）が進行を務めてクロストークセッションが行われ、海陽町教育委員会の森崎忠憲教育次長が「この取り組みは極めて注目度が高く、新たな海陽モデルとして進めたい」と話したほか、新聞記者からの質問に理路整然と回答する学生の姿が強く印象に残った。



クロストークセッション



報告する陽本千咲さん



タブレットを見る野球少年の映像などを紹介

## 防災士資格取得講座

防災と救命を学ぶ4日間

防災士資格取得講座が2月5～8日、初めて開催された。防災と救命について講義と演習を交えて幅広く学ぶプログラムで、キャリア支援センターが主催。警察官や消防官、教員などを目指す学生42名と職員3名の計45名が受講した。

取得するには、特定非営利活動法人「日本防災士機構（JBO）」が認証した研修機関が実施する防災士養成研修講座を受講し、防災士資格取得試験に合格するとともに、全国の自治体や消防署などの公共機関が実施する救急救命講習を修了する必要がある。

大阪府下で防災士養成研修講座と防災士資格取得試験を実施している大学は、本学を含めて3校だけ。さらに本学では、救急救命講習を同時に受講できるところもポイントだ。

講座では、ハザードマップを活用した被害想定、避難所の設置・運営方法などを学び、減災行動と避難行動への備えや、災害医療と心のケアなどの知識を広げた。災害図上訓練（DIG演習）では、冷静に状況を見極めて対応する力を養った。最終日には、これまでの知識の総まとめとして模擬試験を行い、防災士資格認定試験に臨んだ。

また、救命救急講習を合わせて実施。泉州南消防組合の現役の消防士4名の指導で、胸骨圧迫、人工呼吸、AEDの使用、気道異物除去といった一次救命処置のスキルを養った。



一次救命処置を学ぶ学生

## スポーツ局指導者研修 インテグリティの追求

スポーツ局の指導者研修が1月28日、開催され、元日本オリンピック委員会（JOC）選手強化本部インテグリティ教育ディレクターの上田大介さんが「スポーツ・インテグリティ（誠実さ・高潔さ）の追求」のテーマで講演した。

指導者研修はクラブ指導者のさらなる資質向上を目指し、年2回実施。全クラブの監督ら指導者に参加が義務付けられ、研修には監督ら約40人が参加した。

上田さんは「廃部や出場辞退を避けるための心がけとポイント」のサブタイトルで講演。2018年から6年間、インテグリティ教育ディレクターを務めた経験を踏まえ、JOCの取り組みと成果、工夫したポイント、取り入れた仕組みや理論について説明した。

また、足元にあるリスクとして、違法薬物や闇バイトなどの勧誘から選手を守る手立てを解説。参加者に、「不正のトライアングル理論」として指摘される、不正の機会・動機・正当化を与えないこと、不正の予兆を見逃さず、「ひやり」「はっと」に的確に対処し、選手の表情や仕草、言葉、行動にアンテナを張ってほしいと呼びかけた。



スポーツ・インテグリティについて語る上田大介さん

# 旬な大生

い け だ し ょ う  
池 田 翔 さん

体育学部4年・サッカー部男子（新学年）

福島・学校法人石川高校出身。サッカー部。  
東日本大震災復興支援「サンライズキャンプ」に参加。



## 社会貢献活動に 全力投球！

池田翔さんは、1年生の頃からサッカー部の選手が主体の「ゴールキーパースクール」に積極的に参加し、子ども向けのプログラム企画・運営を経験してきた。昨年、地域の現状をよく知ろうと東日本大震災復興支援活動の「サンライズキャンプ」に参加。池田さんにとつての社会貢献活動について聞いた。

### ——サンライズキャンプで感じたことは

実際に現地に行き、リアルに体感して理解することが大切だと感じました。自分たちが企画したスポーツ交流では、地域の皆さんと年齢の壁を越えて盛り上がり、「楽しかった」「来週も来てくれる？」と笑顔いっぱい喜び子どもたちを見て、自分にも支援できることがあるんだと嬉しくなりました。こういった交流の場などを通じて、子どもが心の底から笑える環境を取り戻しつつあることに安心した一方で、震災以降、若者の県外への流出が加速したことで、スポーツの専門的な指導者が十分に足りていないこともわかりました。

### ——今後、社会貢献活動とどう向き合うか

これまでの経験から、サッカーの指導者として、頑張る子どもたちをサポートすることで、地元に残りたいとより強く思うようになり、社会貢献活動と自身の将来の目標が重なったと感じています。今後は、ゴールキーパースクールはもちろん、困っている地域があれば現地に行ってみたいですし、たくさんの方に、体大生ならではのスポーツ交流などを通じて社会貢献活動の輪が広がると良いと思います。

## キャリアアフエスタ 1・2年生就活支援

1、2年生全員を対象にした就職活動支援イベント「キャリアアフエスタ」が2月4日、開催された。

キャリアアフエスタは、1年生は企業や団体で活躍する方の話を聞いて自らの将来について考えること、2年生は内定を得ている4年生から体験談を聞くことで目標を考えるきっかけを作ることが目的。1年生は2チームに分かれ、講師の体験などを聞いたうえで、自身のロードマップを作成した。

2年生は13会場の中から興味のある内定者の教室を選んで受講。プロ野球独立リーグの徳島インディゴソックスに内定している大仲菜奈さん（体育学部4年、大阪・久米田高校）や兵庫県中学校教員に内定している原田茜さん（体育学部4年、兵庫・宝塚西高校）ら26名の4年生が、就活での経験談を話し、後輩から活発な質問が出された。

【講師の皆さん、敬称略】有明葵衣（バスケットボール女子日本リーグ（WJBL）理事）▽長野宏美（元プロテニスプレーヤー、毎日新聞記者）▽山本篤（パラリンピックメダリスト、大阪体育大学客員教授）▽平田史昭（株式会社リアアセック代表取締役CEO）▽森下有梨（大阪府教育庁教育振興室保健体育課）▽竹田和夫（元法務教官、吉本興業グループ企業エグゼクティブプロデューサー）▽菊谷崇（元ラグ



講師の体験を聴く1年生

ビー日本代表▽藤平祐司（大阪体育大学キャリア支援センター長（敬称略））

# 「10年後の自分を想像し 進路を考えて」



キャリアフェスタで



吉本興業グループ企業エグゼクティブプロデューサー

## 竹田 和夫さん

竹田和夫（たけだ・かずお）  
大阪府堺市出身。1985年度、体育学部体育学科卒。法務教官として30年間、全国各地の少年院で勤務。54歳で退職し、吉本興業が運営する沖縄ラフ&ピース専門学校の初代校長に。現在は株式会社よしもとセールスプロモーション&エリアアクションでエリア営業本部九州・沖縄エリアエグゼクティブプロデューサーを務める。

竹田さんは大阪府堺市出身。スポーツとの出会いは小学1年の時、近くの大阪刑務所の道場で開かれていた柔道教室だった。その後野球などを経験し、大阪府立泉北高校に入学すると、ソフトテニス部に所属した。



少年院などで教育や更生支援にあたる法務教官だった竹田和夫さんは、54歳の時、吉本興業HDの大崎洋社長（前会長）に誘われ、吉本興業グループ企業に転職。沖縄で吉本興業として初めて立ち上げた専門学校の初代校長を務め、現在は九州・沖縄エリアのエグゼクティブプロデューサーを務める。母校の後輩に「まだ君たちは完成品じゃない。10年後の自分の姿を思い描きながら進路を考えてほしい」とアドバイスする。

「当時はアニメの『エースをねらえ!』がはやった時期。硬式か軟式かも知らずに入部しました。最高成績は、団体で大阪府3位でした」  
高校卒業後は税務署で働くため、税務大学校に進むつもりだったが、父親の勧めで大学進学に転向。ソフトテニスが続けたいからと大体大に進んだ。  
大学では、ソフトテニス部のレベルの高さに面食らったという。  
「自分の球の勢いには自信を持っていました。1年の時の主将はインターハイベスト8、副主将は3位。どこに打つてもはね返され、ハードルの高さを感じました」  
就職では、最初から法務教官を目指したわけではなかった。新設



気の合う仲間と舞台に（左から 植野君 竹田君 元ミス沖縄さん 松下君）

のテニスコートの管理者になりたくて堺市の採用試験を受けたが合格できず、大学のキャリア支援のスタッフから勧められて、大阪少年鑑別所を受験した。当時は法務教官を目指す、現在の法務省専門職員（人間科学）採用試験などではなく、施設独自の採用だったという。

法務教官は、起床・点検・作業・消灯などの生活指導、学科教育や職業教育の支援、体育や情操教育、

再発防止に向けた指導計画などの個別支援にあたり、シフトを組んで24時間、入所者を指導・支援する。また、問題行動を是正するために戒護権を行使する場合もある。

「異例ですが、自分は1年目から特に非行の度合いが強い少年が入る寮を担当しました。不満を持つ少年の悩みを聞き、カウンセラー的な仕事も多かったですね」

竹田さんは約30年間、和泉学園（大阪）、加古川学園（兵庫）、浪速少年院（大阪）、美保学園（鳥取）、岡山少年院など各地の少年院で勤務。処遇部門を統括する首席専門官も務めた。

吉本興業との出会いは浪速少年院にいたころだ。院の少年たちが人の話を聞けずコミュニケーション能力に課題があったことから、院内で「吉本のお笑い芸人に講師を頼んで」という声が上がった。「ダメ元」で、泉北高校の先輩にあたる大崎前会長に頼んだところ、「ええよ」と快諾。少年院に大崎さんと中田カウスさんがやってきた。18〜21歳の約160人の在院者は中田カウスさんの話にひきこまれ、誰一人微動だにしなかったという。これが縁で以後、何度か芸人を招くなど交流が生まれた。54歳だった2015年、体調面も考えて早期退職を決めた。新宿の東京本部に大崎さんを訪ねると、さりげなくあっさり振られた。「沖縄に

専門学校をつくりたいんや。竹田君だったら、どんな困難があっても怖くないよな」。少年院から吉本への転身が決まった。

沖縄ラフ&ピース専門学校は2018年、那覇市に開校。竹田さんは初代校長に就任した。吉本興業が文部科学省認可の専門学校を運営するのは初めてで、エンターテインメント業界で活躍するクリエイター、パフォーマー、CGグラフィックなどの専門家の育成を目指す。

なぜ沖縄なのか。  
「まず、沖縄は日本で一番アジアに近く、アジア各国をつなぐハブ。芸能事も沖縄は三線などが根強く文化として定着している。芸能のハブとして地理的な位置を考えた時に沖縄があります」

吉本興業グループ企業の九州・沖縄エリアエグゼクティブプロデューサーとして、2024年まで続いた沖縄国際映画祭の運営や、企業、ホテルとタイアップしたフェアの開催など幅広くプロモーション活動に携わる。

今年6月には65歳の定年を迎える。第3の人生は、憧れだったという大型観光バスの運転手だ。

## 母校の後輩へのアドバイスは。

「あなたは今、完成品じゃない。今を基準に考えず、5年後、10年後を見て、そこに立っている自分の姿を想像しながら成長してほしい。私も35年間、仕事はどんどん変化していった。今ある姿は完成形と思わず35歳ぐらいまで頑張っしてほしいというか、もがいてほしいと思います」



スマガツオ自己ベスト 1m 糸満沖にて

## 就職状況

## 公務員合格110人/企業からも高評価

2025年度卒業予定者の就職活動が終了した。2020年代に入り、デジタル技術の普及と採用活動の効率化に伴い、採用面接試験においてオンライン形式が広く導入された。現在ではオンライン形式の面接が定着しており、学生は柔軟にオンライン会議システムを使いこなして選考に挑んでいる。一方で、対面形式の面接も依然として重要視されており、キャリア支援センターでは、学生がどちらの方式にも対応できるように、オンライン・対面双方の面接対策や講座の充実に努めた。

2025年度の公務員現役合格者数は、110人(延べ)。内訳は、国家公務員(刑務官・自衛官・海上保安官)が9人、地方公務員(警察官・消防官・行政職)は101人。コロナ禍以降、さらに公務員人気が高まる中、キャリア支援センターとして公務員コース3期生たちへ「公務員革命」をスローガンに掲げ、学生たちが粘り強く取り組んだ成果が出た。

恒例の全学イベントである「キャリアフェスタ」も、今年度は対面開催を復活させることができた。

3年生対象のキャリアフェスタは8月に開催し、大手企業の人事担当者による講演を含め、2日間で全24の企業・団体に参画いただいた。1、2年生対象は2月に開催し、2年生対象のイベントでは、今年、内定、合格が決まった4年生26人が後輩に向けて熱く語った。また、1年生は企業や団体で活躍する社会人を講師に招いたパネルディスカッションを実施した。講話を通じて多様なキャリア形成を学び、グループワークやロードマップ作成を通して、自身の将来の目標や理想を考える機会となった。

キャリア支援センターの特徴の一つである「学内セミナー」は、本年も多くの企業団体の協力で、昼休みに説明会や業界研究をする学びの場として実施した。

近年、卒業予定者の約50%が企業等(企業、スポーツ関連、医療、福祉、自営業)に進み、高い就職率を残している。各企業から非認知能力の高い本学学生に対する評価は高く、本学の学生に対する期待も一層高まっていると感じる。

【キャリア支援センター】

## 教員採用試験

## 現役・既卒150人合格

## 転換期を迎える教員採用試験

2026年度採用(2025年度実施)の公立学校教員採用試験の現役合格者は、延べ65人で昨年度54人から20%増となった。また、既卒者85人から合格報告があり、合わせて150人が合格した。

現役学生の合格自治体の内訳は、大阪府(17人)、大阪市(6人)、堺市・兵庫県・東京都(各4人)、高知県(3人)、北海道・滋賀県・神戸市・和歌山県・鳥根県・広島県(各2人)、千葉県・川崎市・新潟県・石川県・福井県・三重県・京都府・鳥取県・岡山市・徳島県・香川県・愛媛県・福岡県・長崎県・大分県(各1人)で、北海道から九州まで全国に合格者が広がっている。学校種別では、小学校(小中連携を含む)が44人で全体の68%と多く、中学校11人、中高1人、高等学校3人、特別支援学校6人となった。

既卒者の合格校種は小学校(小中連携・特別支援小学部含む)が26%、中学校・高校・特別支援学校(中学部・高等部含む)の合格者が74%となり、現役の比率と逆転した形となった。また、自治体については近畿圏の合格者が69人で、全体の80%以上を占めた。

2024年度から一部の自治体で導入されていた3年生受験(一次試験もしくは一次試験の一部が受験可能)は、今年度、全国的に広がりを見せ、本学でもチャレンジした学生134名の内47人が合格し、昨年度(受験者62人、合格者23人)から倍増となった。この47人は4年生の本試験の一部が軽減されるため、合格者増への期待が高まる。

現在、教員採用試験は大きな転換期を迎えている。昨年度、文部科学省は公立学校教員

採用試験の第一次選考を、6月16日を基準日とする試験の早期化を打ち出した。今年度は、さらに日程を早めた5月11日を基準日とする日程を各自自治体に求めた。また、7月には、「教員採用選考に係る第一次選考の共同実施に関する自治体協議会」が開催され、51の自治体に参加した会合がもたれた。論議の中で、「統一試験方式」を最終的に目指しつつ、「共通問題配布方式」での共同実施を目指す話し合いが進められた。この共同実施への参加については、既に大阪府をはじめ一部の自治体が2027年度実施の教員採用試験からの参加を表明しており、全国に広がる事が予想される。

教員採用試験では、これらの変化へ対応していくための情報収集や学生への発信拠点としてニーズに応えるとともに、教員採用試験対策模試・各種支援講座・教職オンデマンド講座・全自治体の教採過去問貸し出し等の他に、校長経験のあるスタッフが面接指導だけでなく、教採への勉強の進め方や教職キャリアに関する相談にも対応して、学生一人ひとりに寄り添ったサポートをしている。

教員を目指す学生にとって、教員採用試験の合格はゴールではなくスタートである。教育現場は日々変化しているうえ、学校現場に出れば新人教員といえども「即戦力」として、役割を担っていかねばならない。教員の仕事は、そこに子どもがいてくれるので成立する。常に謙虚で真摯な気持ちで「学び続ける教員」になれるよう頑張ってもらいたい。

【教職支援センター】

## 令和8年度入試

# 競争が激化する年内入試！ 志願者数は7%減!!

令和8年度入試は、志願者獲得競争が激化する中、実施された。

志願者数は、スポーツ科学部が1,028人(前年度比9%減)、教育学部は412人(3%減)となり、総志願者は1,440人(7%減)となった。

近年は入試の多様化を推進するために導入された「年内入試」が年々増加し、年明け以降の一般入試の受験生との二極化が年々加速している。

総合型選抜において、スポーツ科学部志願者数は230人(前年度比14%減)と減少に転じた。その中でも入試制度『アスリート型』受験志願者数は、44人(前年度比28%減)と大幅な減少となった。減少要因としては、他大学の競技実績の高い受験生への早期アプローチが考えられ、今後の対応が重要となる。一方、『自己表現型』は、資格や高等学校での活動実績を加点する制度を導入した入試制度で、今年度は新たな資格の追加もあり、教育学部は84人(前年度比15%増)となったが、スポーツ科学部は186人(9%減)の計287人の志願となった。

学校推薦型選抜は、入試制度に

3つの型があり、『小論文・面接他』『体力テスト・面接』『国語・調査書』と、様々な形態の試験が受験できる。

また、年内入試が年々増加する中、年明けの一般選抜ではスポーツ科学部志願者数が164人(前年度比13%減)、教育学部は110人(前年度比8%減)という結果となった。

各大学で、定員割れを防ぐために年内入試で定員を確保する流れが加速している。本学も同様の方針で入学生の確保に向け、募集活動を強化し、高校訪問や高校ガイダンス、進学相談会を大幅に増やし、精力的に動いた。2027年度入試に向けて、前年度以上の募集活動を設定するとともに、指定校の見直しや受験制度の見直しを進め、更なる志願者増を目標に取り組んでいく。

【入試部】

### <スポーツ科学部>

入試制度	学科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
総合型選抜	スポーツ科学科	110	230	211	117
スポーツ特別総合型選抜	スポーツ科学科	120	178	178	178
DASHアスリート特別総合型選抜	スポーツ科学科	5	2	2	2
卒業生女子型選抜	スポーツ科学科	-	6	6	5
学校推薦型選抜	スポーツ科学科	200	441	435	296
一般選抜	スポーツ科学科	85	164	160	76
外国人選抜	スポーツ科学科	若干	7	7	2
合計	スポーツ科学科	520	1028	999	676

### <教育学部>

入試制度	学科	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数
総合型選抜	教育学科	30	84	76	30
スポーツ特別総合型選抜	教育学科	5	7	7	7
DASHアスリート特別総合型選抜	教育学科	-	0	0	0
卒業生女子型選抜	教育学科	-	2	2	2
学校推薦型選抜	教育学科	50	209	204	125
一般選抜	教育学科	40	110	109	19
合計	教育学科	125	412	398	183

## 2校と高大連携協定 奈良育英、和歌山北

大阪体育大学は奈良育英高等学校、和歌山県立和歌山北高等学校と高大連携協定を締結した。

奈良育英高等学校との締結式は1月13日に本学で行われ、奈良育英中学校・高等学校の米田安男校長、倉森博司高大連携室長、東浦将太進路指導部長の3名が本学を訪問。神崎浩学長は「奈良育英高校は教育、スポーツの両面で実績を挙げられ、本学としても是非とも協力していきたい学校の一つです。色々とご提案をいただき、この連携協定が両校の発展につながるよう進めていければと考えています」とあいさつした。

和歌山北高等学校との締結式は2月19日に本学で行われ、川口勝也校長、安野秀樹教頭、半田和紀スポーツ健康科学科長の3名が訪問。神崎学長は「和歌山県とは立地的にも関係が深く御校からは来年度は9名の入学が予定されています。この協定が両校の発展の契機になれば」とあいさつした。



和歌山北高等学校との締結式



奈良育英高等学校との締結式

# 学長特別表彰

## 国内外で活躍の3クラブ9選手



学長特別表彰式が1月22日に行われ、2025年度に国内外の競技大会で優秀な成績を取めた3クラブと9選手が表彰された。

表彰式では各団体と選手に表彰状などが手渡された。

続いて、神崎浩学長が「本学にとってクラブ活動は教育の一環で、競技成績も学業成績も両方高めていくことが目標です。皆さんは他の学生の見本となるよう今後も頑張ってください」とあいさつし、学友会の福島混哉会長（教育学部3年、大阪・阪南高校）が「本日受賞された皆さんの姿は、我々学生たちにとって励みになります。学友会としても学生が成長できる環境を守るため力を尽くしていきます」とお祝いの言葉を述べた。

最後に受賞者を代表して、ハンドボール部女子の小沼美尋選手（体育学部4年、千葉・昭和学院高校）が「12連覇を達成することができたのは、楠本先生はじめ教職員の方々のおかげです。何かに全力で一生懸命取り組むことのできる環境を当たり前だと思わず、これからも目標に向かって感謝の気持ちを忘れずに精進します」と誓った。

- 【団体】** ハンドボール部女子 全日本インカレ優勝（12連覇）  
アダプテッド・スポーツ部 日本車椅子ハンドボール競技大会準優勝  
硬式野球部女子 全日本選手権大会3位
- 【個人】** 柏崎 咲和（体育学部4年、福井工業大学附属福井）  
畑中 ゆりあ（体育学部4年、埼玉・花咲徳栄）  
山本 一花（体育学部4年、大阪・履正社）  
木村 睦実（体育学部4年、京都両洋）  
荒川 莉子（体育学部3年、鹿児島・神村学園高等部）  
坂 ちはる（スポーツ科学部1年、大阪体育大学浪商）  
福島 琉斗（スポーツ科学部1年、大阪体育大学浪商）  
大崎 日和理（教育学部1年、大阪体育大学浪商）  
内田 峻介（大学院博士前期課程1年）

- BFA女子野球アジアカップ優勝 MVP・最優秀防御率
- BFA女子野球アジアカップ優勝 首位打者・最多得点・ベストナイン
- BFA女子野球アジアカップ優勝 ベストナイン
- BFA女子野球アジアカップ優勝
- BFA女子野球アジアカップ優勝
- 日本陸上競技選手権大会 女子砲丸投げ優勝
- 全日本体操種目別選手権 男子ゆか3位
- 座位バレーボール・アジアオセアニア選手権大会 女子3位
- 日本ボッチャ選手権大会B/C 4男子優勝

# 大島鎌吉スポーツ賞

## 指導者5人に授与

本学学生のスポーツ指導に顕著な業績を残した指導者に贈られる大島鎌吉スポーツ賞の授与式が、1月7日に行われた。

功労賞を楠本繁生・スポーツ科学部教授（ハンドボール部女子監督、1月末退任）、横井光治・教育学部准教授（硬式野球部女子監督）、奨励賞を藤原敏行・スポーツ科学部教授（体操競技部男子監督）、中西啄真・スポーツ科学部講師（陸上競技部投てきブロック監督）の計4人が受賞した。

昨年、楠本教授はハンドボール部女子が全日本インカレで12連覇。横井准教授はBFA女子野球アジアカップに、硬式野球部女子の5選手が出場して4連覇。藤原教授は体操競技部男子の福島琉斗選手（スポーツ科学部1年）が全日本種目別選手権のゆかで3位に入った。中西講師は陸上競技部の坂ちはる選手（スポーツ科学部1年）が日本選手権女子砲丸投げで優勝した。

また、1月の日本ボッチャ選手権大会男子B/C 4で内田峻介さん（アダプテッド・スポーツ部、大学院）が優勝し、同部監督の曾根裕二・教育学部教授が奨励賞を追加受賞した。



# 日本スポーツマネジメント学会を共催

## 体大生12名が運営サポート

日本スポーツマネジメント学会の第18回大会が2月27～28日、大阪商業大学で開催された。本学と大阪商業大学が共催し、実行委員長をスポーツ科学部の藤本淳也教授・学長補佐が務めた。また、本学学生12名が運営スタッフとして大会をサポートした。

大会には各大学の研究者、学生、ビジネスパーソンら約220人が参加した。

大会前日の26日には、大阪府中央区の大阪商工会議所で学生会員や一般学生・大学院生を対象にしたスチューデントセミナーを開催。27日の第1日は、提案型新シンポジウムが3テーマで行われた。

最終日の28日は学会名誉会長の原田宗彦・大阪体育大学学事顧問が「スポーツまちづくり最前線・アクティブシティ戦略」のテーマで講演。実行委員会企画シンポジウム「スポーツマネジメントの新天地・学術×ビジネスの共創に向けて」では、藤本実行委員長がモデレーターを務めた。

昼食時のランチオンセミナーでは、「子どもスポーツの課題解決に向けて」をテーマに、公益財団法人ライフスポーツ財団理事長の清水進さんと常務理事の河原慶子さんを招き、大阪体育大学スポーツ科学部の富山浩三



教授がモデレーターを務めた。実践報告発表（ポスター）では、「大学スポーツSDGs活動の実践―廃棄バットの再利用―」として、体育学部4年の福永晴翔さん（北海道・函館高校）、正井信之介さん（兵庫・須磨友が丘高校）、大仲菜奈さん（大阪・久米田高校）の研究が発表された。

## 日本バレーボール協会 24年ぶりに本学で開催

日本バレーボール協会第31回大会が3月2、3日、本学で開催された。

本学での開催は24年ぶり。沼田薫樹講師（バレーボール部男子監督）が実行委員長、長江晃生准教授（同女子監督）が副実行委員長を務め、バレーボール部男女の学生9名が運営のサポートにあたった。

第1日の2日は、日本バレーボール協会前理事の原田宗彦・大阪体育大学学事顧問が「バレーボールをもっと人気企業にするために…進化するスポーツビジネスの視点から」と題して講演。スポーツ科学部の藤本淳也学長補佐・教授が司会・進行を務め、シンポジウム「バレーボールの未来を支える社会連携とスポーツマネジメント」も開催し、本学卒業生のパネリスト3人と語り合った。

最終日の3日は、第4体育館でオンコートレクチャーを実施。卒業生で2025女子U21トレナーの松田篤実さんが「試合に向けてのコンディショニングマネジメント」について解説。長江准教授が司会を務め、バレーボール部員がモデル役を務めた。

また、バレーボール部女子のアナリストで4月から大学院に進む宮内こころさん（体育学部4年、福岡・誠修高校）が「大学女子バレーボールのアナリストの特性に関する研究」をポスターで発表した。



# ウィンターキャンプ

## 学生が子どもと寝食ともに



泉大津市主催の小学生スポーツ体験プログラム「ウィンターキャンプ2026」冬の自然の中で環境について学ぼう―が、1月に1泊2日で行われ、泉大津市の小学3～6年生39名が参加した。

市町村教育委員会と大学が共同でイベントを開催する例は全国的にも珍しい。本学の大学院生と大学生10名が参加した子ども達と寝食を共にし、環境学習や雪遊びなどを通じて仲間と協力する大切さや挑戦する楽しさを体験できるよう支援した。

社会貢献センターは、泉大津市教育委員会から委託を受け、2024年度から小学生スポーツ体験プログラム「めざせ!!スポーツマスター」を実施してきた。今回のウィンターキャンプは、「めざせ!!スポーツマスター特別編」として、本学が泉大津市教育委員会に協力して開催し、スポーツ科学部の富山浩三教授がキャンプ長を、伊原久美子教授がプログラム長を務めた。また、伊原研究室の大学院生とゼミ生がキャンプカウンセラーとして子ども達の指導に携わった。

プログラムは、冬山の自然環境での生態系や生物の多様性に触れながら環境保護について学ぶことと、集団活動で初めてのことにチャレンジしチームワークやリーダーシップを身につけることを目的に、兵庫県美方郡香美町にある尼崎市立美方高原自然の家とちのき村で実施された。

## 学生”夢”プロジェクト テニス部、池島ゼミ生が報告

学生主体で企画・実行するプロジェクトを大学が支援する「学生夢プロジェクト」の報告会が2月25日、行われた。

今年度は事前に申請のあった4件のプロジェクトについて学生がプレゼンし、審査を経て2件が採択された。

報告会では、テニス部男子の栗生和馬(くりう・かずま)さん(体育学部4年、和歌山・海南高校)が「男子硬式テニス部」いらなくを地域の方に伝え、用具を再利用することで、スポーツを通じた社会貢献活動、スポーツSDGsを実践する取り組みだ。テニス部の学生5名がテニス体験教室を開き、地域の方に再生したラケットなどをプレゼントした。

体育学部3年で池島明子ゼミの阪本芹渚(せりな)さん(愛媛・聖カタリナ学園高校)、廣瀬瑠奈(るな)さん(京都・福知山成美高校)、山田絵斗(かいと)さん(兵庫・須磨翔風高校)は、「みんなが楽しむニュースポーツ!」を報告。池島ゼミの学生が日根野小学校の児童に、「キンボール」「モルック」を指導した。



児童にキンボールを指導する学生



◆OHSジャーナルは2023年10月号から、その時々旬な学生の笑顔が表紙を飾るようにリニューアルしました。大阪体育大学の一番の財産としてアピールすべきなのは、元気で意欲的な学生の力だと考えたからです。

◆先日の開学60周年記念シンポジウムでは、ICTを活用して運動部活動指導にあたる学生によるシンポジウムが開催されました。学生は次々に登壇し、指導現場での体験や課題を活き活きと語りました。部活動改革を早くから深く取材している新聞記者からの鋭い質問にも理路整然と回答する学生の姿は、とても誇らしく感じられ、参加した他大学や行政、企業関係者から注目を集めていました。

◆1月にミスノ株式会社の人材担当の方を取材しました。その方の大体大生評は「目標に向かって努力を積み重ねる力は他の人に比べて強く、周囲の社員を巻き込む力がある」。実際、リーダーシップやコミュニケーション能力など非認知能力を測る民間テストの数値は、全国トップクラスです。

◆全国に誇れる大体大の「学生力」。無限の可能性を秘めた新入生の皆さんをキャンパスに迎えます。これから始まる学生生活で、その力がどこまで伸びていくのか、楽しみです。

【大坪康巳】

# 迷惑をかけずに歩くには



コラム **ボーシヤ**

名誉教授 和田隆夫

歩き方について思い出すことがある。

小さい頃、歩き方にはとても興味があった。小学生の頃には、右手と右足、左手と左足を同時に出して歩く遊びをしていた。当時はこれがナンバ歩きだとは知らなかった。また『少年探偵団手帳』に説明のあった忍者歩きもよく試していた。足音を消して静かに歩く、いわゆる忍足（しのびあし）である。

中学生になり、毎朝、勇んで通学していた。そのうち歩くスピードを上げたいと思うようになった。そこで思いついたことがあった。通学カバンと当時流行していたマディソンバッグを両手にそれぞれ持ち、同時に前後に振れば速く歩けるのではないかと考えた。名案のつもりで一週間ほど続けていたが、ある朝のホームルームで女子生徒が「先生、和田君が変な歩き方をしています」と言い出し、やめてしまった。

それからは普通に歩いている。ただ高校に入学した春、まだ市電で通学していた頃、家から停車場までの最短ルートを調べようと思った。そこで、10くらいのルートの歩数を数え、五回ずつ測定して平均を取り、最短ルートを決めた。2ヶ月ほどかかったが、結果が出たときはうれしかった。しかしその間、歩数を数えることに集中していたため、通学途中の友人には無言で手を上げていただけだった。

その後、歩行に絡んだ特別なことはなく、歩いている。つまり体に染み込んだルールと交通法規を遵守して歩き続けている。

体に染み込んだルールとは、大阪流（と言っていいものかどうかはわからないが）と勝手に思っている歩き方で、「黄色信号になれば走って駆け抜ける」。しかし道路交通法施行令第2条は、黄色信号では「歩行者等は、道路の横断を始めてはならず」と定めている。

以前、東京で学会があった際、私の尊敬する研究者と懇親会場に向かっていた。信号が黄色になり、私は思わず駆け出そうとしたが、その先生は立ち止まり、「黄色ですよ」と静かに言われた。その先生の鷹揚な態度に憧れ、そのときから歩行者であっても道路交通法を守るべきだと考えるようになった。道路は全国につながっている。交通ルールにローカル色があってはならないと思うようになった。

その後、甲南大学法学部で「福祉法政策」という講座を担当していた時期がある。さまざまな福祉法の問題を扱う中で、「視覚障害者と歩行」という講義を行った。視覚障害者が安全に歩くための法制度はどのようなものか、法令や裁判例を手がかりに学生に考えさせる内容である。講義をしながら私の頭に浮かんでいたのは、移動権という考えだった。移動権とは、人が自由に移動できるという人権である。そのような人権をあえて言わなくても、歩行はもともと自由である。ただ土地所有や危険な場所など様々な理由から、歩くための道ができた。すぐにその道を歩行者と馬（車）や荷車が共同利用し始め、交通の安全確保が課題になっていく。そうすると道のルールが必要になる。この点は古代ローマのアッピア街道も、日本の東海道も、現在の道路もまったく同じである。道路交通法第1条は「道路における危険を防止し、交通の安全



と円滑を図る」と規定している。

最近ベトナムで衝撃的な体験をした。

昨年クリスマス前から2週間ほどベトナムに滞在した。初めてのベトナムである。いくつか地方都市をめぐり、最後にサイゴンと呼ばれていたホーチミン市を訪れた。

ベトナムにも日本と同様の交通法規はあるが、実際には、歩行者の道路横断は、車やバイクの運転手と歩行者の相互調整によって行われている。青信号はもちろん渡るが、黄色信号でも渡り、赤信号でも周囲の状況を見ながら渡っている。（下の写真は、ベトナムみやげのTシャツ）交通法規は守られるべきものだという法意識を努力して涵養してきた私には、かなり戸惑う光景だった。



その原因や背景はどこにあるのか。

ホーチミン市の道路にはバイクが溢れるように走り、その間に車が混じる。自転車はほとんど見かけない。バイクの多くは二人以上で乗っている。このため全体の交通の流れはそれほど速くはなく、むしろゆるやかである。また、バイクは減速してもなかなか停止しない。さらに信号のある横断歩道も多くない。

このような状況の中で、歩行者は信号のない場所でも自由に道路を横断している。現地の人に教えられた歩き方は、「まっすぐ、同じ速度で歩くこと。そして途中で止まらないこと、走らないこと」である。最初は恐ろしく感じたが、その通りに歩くと、バイクの流れが自然に歩行者を避けていく。つまり歩行者と車両が互いの動きを予測しながら流れを作っているのである。それでも先頭を歩くには相当の勇気がいる。これこそまさに「生ける法」の実例だ。社会の秩序は必ずしも制定されたルール（法令）だけによって成り立つわけではない。人々の生活の中から自然に生まれるルールも存在する。日本では法規制による秩序が強く意識されるが、ベトナムでは人々の相互調整によって秩序が生まれているように見えた。

その光景を見ていて、ある自然現象を思い出した。夕方の空を舞うムクドリや群れや、海中で群れるイワシやアジである。数えきれないほどの個体が同時に動いているにもかかわらず、互いに衝突することなく滑らかに形を変えていく。中央に指揮者がいるわけでもないのに、秩序が生まれている。その様子は、ある意味で美しい。

そういえば大阪にも典型例があった。大阪・梅田の阪急百貨店と阪神百貨店の地下出入口に挟まれた広場は、多くの人々が異なる方向へ歩いているが、歩行者同士が互いに速度や進路を微妙に相互調整しながら、ぶつかることなく行き交っている。

法規制による秩序と、人々の相互調整による秩序を二項対立させず、どこで折り合いを見いだすか、梅田の雑踏で相互調整しながら、そんなことを考えている。



**本物**を学び、極める

## 大阪体育大学

---

### 【大学院】

- スポーツ科学研究科  
博士（前期・後期）課程

---

### 【スポーツ科学部】（1年～3年）

- スポーツ科学科

### 【体育学部】（4年）

- スポーツ教育学科
- 健康・スポーツマネジメント学科

### 【教育学部】

- 教育学科

---

### 大学事務局

庶務部、教学部、入試部、広報室  
キャリア支援部、大学院事務室

### 大学附置施設等

図書館、スポーツ局、社会貢献センター  
情報処理センター  
スポーツ科学センター  
国際交流センター、学習支援室

---

<https://www.ouhs.jp/>

OUHS ジャーナル 2026年(令和8年)4月1日(水)

発行所：大阪体育大学 広報室 発行責任者 大坪康巳 協力：教育後援会・学友会  
大阪府泉南郡熊取町朝代台 1-1 電話(072)453-7021 FAX(072)453-8818